

Title	考古学で開く対話とデジタルアーカイブ
Sub Title	
Author	安藤, 広道(Andō, Hiromichi) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.9/10, No.1 (2023. 3) ,p.6- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	合併号 DMC TALK
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000009-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

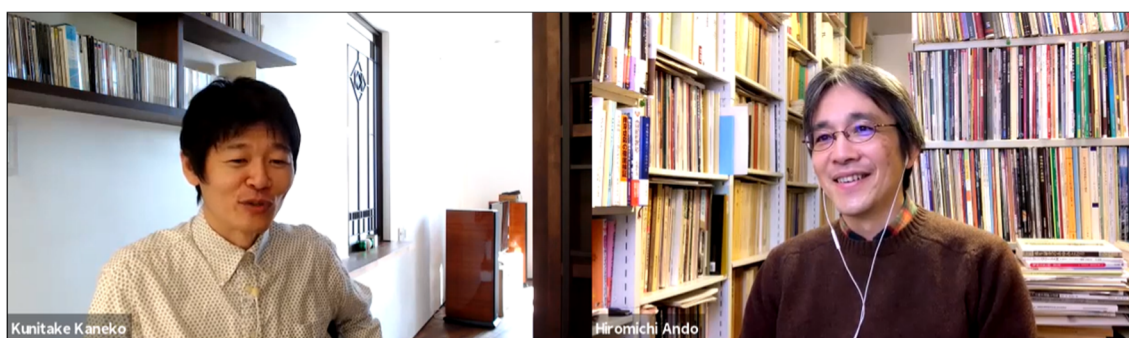
【DMC TALK】

考古学で開く対話とデジタルアーカイブ

安藤 広道(慶應義塾大学文学部教授・DMC 研究センター副所長)

金子 晋丈(慶應義塾大学工学部准教授・DMC 研究センター研究員)

※役職は対談当時のものです。



金子：今日は DMC 研究センターの副所長で文学部の安藤先生にお越しいただきました。お越しいただきましたといっても Zoom なので、こうやってしゃべる感じですが、すけれども。まず安藤先生のほうから、どういふことをご研究なさっているか、お話しただけですか。

安藤：はい。私自身、専門は考古学なんですけれども、現在はちょっと考古学のイメージから外れちゃうかもしれないんですが、アジア太平洋戦争期という新しい時代の戦争遺跡の研究をやっています。また、ただ単にその戦争遺跡を調査して、なんらかの歴史を明らかにするというだけではなくて、戦争遺跡を舞台とした公共考古学というんですけど、Public Archaeology ですね、その公共考古学的研究を、今進めております。簡単に言うと遺跡に関心を持つ人なら誰でも参加できて、自分の考える戦争や戦争遺跡に関する歴史を語ることができ

る。そのような場の構築を目指した研究ということになります。

慶應義塾の日吉キャンパスには連合艦隊司令部という、海軍のある意味中枢的な組織がアジア太平洋戦争期に存在していました、その司令部が残した地下壕、巨大な地下壕が存在するんですね。その巨大な地下壕を中核とした公共考古学的な研究、これが現在の私の研究テーマになっています。

ただ、過去を振り返るといろんな研究をやってきていまして、一つ一つ挙げていくと本当にきりがありませんけれども、それこそ縄文時代、弥生時代の遺物の研究、遺跡の研究。それから、東アジアを含めた農耕の技術史。近世や中世の絵図の歴史地理学的な研究とか。あとは DMC がらみで言うと、考古学資料のデジタル化をどう進めていくとか、そんなような研究を進めてきました。ですから、実は私は、専門はなんですか、って聞かれるのがちょっと苦手で。身近にあるものならなんでも、なんて

いうんですかね、身近な対象、つまりじっくり観察したり、分析したりできる対象を選んで、そこに何かしらの解決すべき課題や問題を見つけると、自分がそれまで何をやってきたかなんていうことを気にせず研究に取り組む、というのが僕の基本的なスタンスということです。

金子：ありがとうございます。

公共考古学と広がる世界

金子：先ほど、公共考古学のお話がありました。参加型って言ってもいいかもしれないですね。考古学というと、どちらかというと昔こうだったというのを明らかにしていくようなイメージあるんですけども、参加型になっていくと、やっぱり各参加する人のバックグラウンドによって理解の仕方とか真実、真実という表現がいいかどうかよくわかんないですけども、そこに近づいていくアプローチも違えば、行き着いた先も違うような感じがするんですけども、そのあたりの違いってというのはどういうふうにお考えですか。

安藤：そこが実はとっても大事なところで、この参加型というのは先ほども言いましたけれども、べつに考古学や歴史学を専門にしている人たちだけが参加する場ではないんですね。それこそ本当に多様なバックグラウンド、いわゆる一般の方々、戦争遺跡に関心を持っていさえすれば、どんな方でも参加できるというような場を想定しているんです。そこには実は大きな意味があって、僕は考古学を専門にしていますから、やはりどうしても考古学のこれまで勉

強してきた研究方法や、対象の見方ですよ。自分自身が持っている知識や認識によって、その資料を見て研究をしていく。ある意味では、考古学という学問の体系であったりとか、構造であったりとか、そういうものに縛られた見方をしているんですよ。

ところが、そこに僕と全然違うバックグラウンドを持っている人が関わると、例えば文献を中心とした歴史学者であれば、文献の研究成果としての歴史をそこで語ってくれます。学者、研究者じゃない人たちも、例えば自分の親御さんから聞いた体験であったりとか、自分自身のいろいろな戦争に関する経験、世界中でいろんな戦争のニュースとかあると思うんですけども、そういうことを見聞きして感じたことであったりとか、あるいはそれまで勉強をした



り、または場合によっては反戦活動に参加したとか、そういういろんな自分自身のさまざまな経験に基づくバックグラウンドから、資料、遺跡を見て、いろんな発言をしてくれる。そうすると、僕自身が考古学者という枠組みでどうしても見ちゃっているところから大きく外れたような視点や見解が出てくるんですよ。

そういうさまざまなずれといいますか、言ってみれば、それぞれみんな世界が違うわけですけども、その複数の世界を交錯

させ、そこに対話を生み出すことによって、僕自身も今まで気が付かなかったようなものの見方ができるようになったりする。あるいは、対話に参加したりしてくれている人たちも、それまでは凝り固まった戦争に対しての一面的な理解というのがあったにしても、それが少しずつ違った見方の存在というところに目が向くようになり、そういう考えも重視していこう、みたいになっていく。(戦争遺跡をめぐる)対話の世界をつくっていき、それぞれが自分たちの世界とは違った世界の存在に対する目を開いていくというんですかね、これが一番大きな目的ということになります。

金子：なるほど。そうすると、ある既存の価値観で整理された情報に、安藤先生の頭の中は新しい刺激によってそれが組み換えられるような感じになっていくと思うんですけど、今、例えば後ろにある本とかも、ダイナミックな組み換えってされているんですか。昔の、頻繁に利用されていた当時の価値観で並んでいるのでしょうか。

安藤：並んでいるんですよ。実はですね、僕は今、いろんな研究をやってきたって言いましたけれども、現在取り組んでいる研究に関わる本が、背中のところ、ここに横積みされるんです。で、その後ろにも実は、本棚がたくさんあるんですけども、そこには少しずつ過去のもので並んでいると言えいいんでしょうか。つまり、今一番向こう側にあるのは、最も古いといいますか、以前にやっていたことで、それがなんていうか、まさに考古学の地層じゃないですけど、(時間軸で)並んでいるという。これを発掘していくと実は僕の研究の

歴史がわかる。そういうことになっていきます。

金子：そのときにプライマリーの整理の軸というか、それはなんていうんですかね、変わるんですか。今は研究プロジェクトというか、研究単位ごとに層になっているという話からすると、その一個一個の層の構成というか、それはなんか違うやっぱり価値観になる。別のクエスチョンの仕方をする、もし仮に20年前にやられた、昔やられた例えば弥生とか縄文の話は今もう一度やろうとすると、違う整理方法に、整理になるんですかね。



安藤：なるでしょうね、きっと。例えば自分自身が卒業論文などで取り組んでいた弥生式土器の研究を、今、同じようなかたちで仮にやろうとすれば、構成的には同じようになっていくのかなという気はしますね。ただ、現在はいろんな研究の経験を僕自身が積み重ねてきていて、もうすでにその20年前とか30年前の自分ではないので、そうすると、同じような研究をするといっても、全然違った枠組みになっていくわけですね。ですから、実際に同じ対象を同じように研究しろというふうになったとしても、現実的には、今の自分の考え方に基づいてレファレンスを整理しようとするので、かなり異なったものになっていくだ

ろうなという気はしますね。

具体的に言うと、僕は今、公共考古学的な研究をやっているじゃないですか。先ほども申し上げたとおり、いろんな人がいろんな立場から参加できるような場ですよ。僕が20年前とか30年前に土器の研究をやっていたころには、対象とする土器の専門的な研究を話すことができるコミュニティーしか（対話の場を）想定してなかったんですよ。だけど、現在こういう研究に自分自身が進んでいるので、仮にそうした重箱の隅をつつくような研究をやったとしても、それが研究者のコミュニティーの外側の人たちとどういふふうな対話を組み立てることができるのか、ということを考えながら研究をやると思うんです。当然本棚に並んでくる本の種類や順番というのも変わってくるんだらうなって気がします。

対話の枠組みとシャープネス

金子：想定する対話相手とかはあるんですか。

安藤：ええとですね、僕は今も考古学の研究をやっていますが、縄文土器や弥生土器のそれこそごりごりの細かい研究をやっていたころですね、そのころは、日本の考古学の専門的な知識、方法論であったりとか、考古学の研究の歴史をある程度共有していたりする人たちをまず想定してコミュニケーションを取ろうとしてきたわけですね。もっと極端なことを言うと、僕が研究対象としているある地域のある時期の土器や土器型式（の知識を持っている人）。こういうふうには絞っていくと、日本の中でも5～6人ぐらいしか専門的な話ってできな

いことになってくるわけですよ。

実際の研究では、コミュニケーションの相手を、そこまで狭い人たちに絞ってしまっている。研究では、まず過去の研究の問題点を僕がある程度整理して、そこで見つかった課題に取り組むわけですよ。そうすると、批判の対象となった人がどうしても僕の頭の中にあるわけですから、極端なことを言うと、その人に対して僕は語り掛けていることになるわけですよ。だから、私が過去にやってきた研究というのは、コミュニケーションの枠組みというのがかなり狭い。そういうことに本当に遅ればせながら気が付いたのが、まあ2008年ぐらいだったんですよ。そこから、それじゃあいけない。もっと対話の枠組みを広げていくべきだろうということで、公共考古学という研究に進んでいったということなんです。

金子：その対話の先を広げていくと、一般論で言うと、あるトピックに対するシャープネスが落ちてくるような気がするんですけども。シャープネスを維持しながら、この対話先を広げるということは可能なんですか。

安藤：そうなんですね。そこは今、悩みどころでもあるんですね。例えば、そのシャープネスという言葉はどうイメージするかもあると思うんですが、少し前に僕が言ったコミュニケーションの場を狭くしていくようなシャープネス、つまり最先端といった感じですね。そういうところでは、実は議論が非常にシャープさを持つようになるというか、情報と論理が極めて整合したよ

うなかたちで、強い説得力を持つようになっていく。そうしたシャープさというものと僕がリンクしちゃっている。

つまり、われわれは、ある情報を選択して整理し、ある学問の世界の中でこれが正しいというか、こういうふうになれば説得力を持つでしょうという論理に基づいて、言説を組み立てる。そうすることによって、強い説得力を持つような言説をつくり出していっているんじゃないかと思えます。やっぱりそこでは、なんらかのかたちで選択された情報の共有、その学問に特有の秩序や構造の共有ということが前提としてあるんじゃないかという気がします。また、そうしたシャープさを持てば持つほど、言説自体が強い力を持ってしまって、その外側にいる人たちが、それに対してアクセスというか、対話の糸口を見つけにくくなってしまふんじゃないかということにも目を向ける必要があります。

まあ、激しく厳しい論争を繰り返し、学術的な成果としてのシャープさというものを保っていくこともとても大事だと思うんです。僕自身も、今でもそういうことに取り組んでいきたいという気持ちはもちろん持っているんです。でも、一方で、そうしたかたちで言説に力を持たせれば持たせるほど、実はその世界の外側にいる人たちとのコミュニケーションの可能性を狭めていってしまっている。そういうシャープさにもなっちゃうんじゃないかなということなんです。そこは、自分自身の研究をどう組み立てていくのか、どういうふうにデザインしていくのか、というところと関係してくるんですけれども、常に悩んでいるところではありますね。

ものの世界と人の関係性

金子：この DMC TALK って、そもそもコンセプトとしては、僕は IT 専門で、デジタルアーカイブをつくらうとしていて、そのデジタルアーカイブって本質的に何かというのを、いろんな方から教えていただくというものなんですね。安藤先生ともいろいろプロジェクトを一緒にやらせていただいて、そう考えていったときに、今の話、非常に面白く聞かせていただいて。

アーカイブをつくっていいこうとすると、想定するアクセスする人というかがあるかないかみたいな話で、まさに今、先生がおっしゃられていたところがあると思うんです。デジタルでより流通が広がっていけば、広げていきたい、それがデジタルのいいところ。簡単に世界中に文献を渡せますよだとか、写真、デジタルの写真を送れます。それがいいところだと思うんですけど、じゃあ、デジタルアーカイブでも同じようなコンセプトであまねく広くデジタルリソースでうまく情報を共有していきたいというふうなことを考えていくと、非常に今のシャープネスの話、間口の広がり、資料をどう整理して置いておくのかというのは興味深く思うんですね。

で、ちょっと変わった質問かもしれないですけど、いつも資料があって、安藤先生がいらっしゃって、対話先があるという、あいだに安藤先生が入っていると思うんですけど。安藤先生がなくて、あるお客さんが安藤先生の棚を見ると、それで何か伝わるものってあるんでしょうか。要するに、その所蔵庫は、安藤先生のそういった今、お話いただいた内容とかを理解し得るのか。



安藤： どうでしょうね。そこはちょっとイメージがまだ湧かないところがあるんですけども、仮に僕が今、自分がやっている研究に関わる情報をデジタル化し、それをなんらかの秩序に基づいて整理し格納していくとします。それを外部の人、僕とその秩序や構造を共有していない人が見れば、まず自分とは違うなということは感じてくれると思います。自分とは違うな、なんだろうな、という疑問は感じてもらえるんじゃないかなって思うんです。それだけでもいいのかなという気がしますね。なんで自分とは違う情報の収集、情報の整理の仕方をこの人はしているんだろうというところに疑問をもつだけでも、実は自分とは違った、対象物から広がる世界があるということに気が付いてくれるんじゃないかなと思います。僕自身の持っている秩序や構造というところに、デジタルアーカイブの構成からどんどん切り込んでいき、僕自身を読み解いていってくれるかどうかは、正直できないのかなという気はしますけれども、でも、想像をかき立てることはできるかなと思うんです。

先ほど金子先生が、対象物、例えば遺跡があつて、僕がいて、その外側にその他の人がいるというふうにおっしゃいましたが、僕の考えるものの世界と人の関係というのはちょっと違っていて、ものを中心に人が集まるという、あくまでもものが真ん

中にあつて、そのものに対して僕がそこにいる人たち全員に、僕自身がそのものをどう見ているのかということ発信するんですね。一方で、僕とは違うそのものを見ている人は、自分はこのものの見方をしているということを発信する。つまり、さっきのデジタルアーカイブの話で言うと、それぞれが自分のデジタルアーカイブ、そのものに対するデジタルアーカイブを公開して、自分はこうやっているんですよということを発信していく。隣を見ると、自分とはまた全然違うことをやっているな、別のところを見ると、またそれとは違うことをやっているなど。そしてそこで、なんでこういうことをやっているの、なんでこう理解しているの、みたいなところを話していくというんですかね。まあ、そんなようなことを考えています。

ですから、これも僕自身のある意味では極端なイメージなのかもしれませんが、ある遺跡のデジタルアーカイブというものを、遺跡を中心に集まった公共的な世界にいるいろんな人たちのあいだで共有できるようなかたちで構築しようとは思ってはいないんですね。もちろん、ソースをそれぞれ共有するということはあると思うんですが。例えば、遺跡の3次元データであるとか、映像や画像であつたりとか、あるいは遺跡から出てきた遺物の調査の記録であつたりとか、そういう一つ一つのソース自体はみんなシェアできるようにしていてもいいかもしれないんですけども、具体的な自分の研究といいますか、その遺跡に対する見方、ものに対する見方を構築する際のアーカイブ自体は、それぞれが個別に組み立てていくもののような気がするんです。

そこで注意しなきゃいけないのは、例えば、こういう情報をみんなでシェアしようねということをアプリオリに決めないということだと思っています。考古学はも



のを扱う学問なのですが、ものってある意味、無限の情報を持っているんですよ。あらかじめ、こういう資料のこういう情報が研究の対象になりますとか、この資料のこういう側面がこういう歴史に結び付きます、というところをあらかじめ決めてしまうと、それによってどうしてもその情報を共有する人たちの視野が狭められてしまうので、アプリオリにはそうしたことは決めない。それぞれがやっぱり独自のアプローチをして、私はこういうような情報の取り出し方をしましたよ、ということ自分のアーカイブに入れて公開することによって、ああ、こんな見方もあるんだな、ということ、ほかの人からも見えるようにしていくことが大事なのかな、というふうに思っています。

金子：なんかこう見方を、ものを共有する枠組みを決めるのではなくて、見方を共有するメカニズムが欲しいみたいな、そんなふうにかう聞こえて。

安藤：あ、いや、見方は共有はしないんですよ。

金子：ああ、それぞれの見方をいかにスムーズに。

安藤：そうですね。それぞれの見方をそこに参加する人たちが自由に見られるようになるというんですか。まあ、あんまり自由じゃ困るんだろうと思いますけれども、それなりにそのコミュニケーションが取れるようなかたちで相互にアクセスできるということですかね。

金子：それって、まったく僕、今、イメージが湧かなくて。さっきの質問につながるかもしれないですけど、例えば、先生の後ろの書棚を写真を撮って公開する。僕の書棚はこれ、私の書棚はこれみたいなので、価値観の共有って成し得る、もしくは着眼点の共有って成し得るのか。なんていうんですかね、着眼点とか視点って、なんかこう非常に言語化といたら適切じゃないですけど、その実体をつくることって非常に難しいじゃないですか。そんなことないですかね。

安藤：だから、これも実験的にやってみないと、ある意味で想像の世界で語ると怖いかもしれませんが。でも、仮にですね、僕が、戦争遺跡に関心を持つ考古学者ではない人の書棚を見るとしますね。同じ日吉の連合艦隊司令部地下壕に関心を持ち、調べ、そして語っている人の書棚です。そこにはたくさんの本が並んでいるんじゃないかと思うんですが、それぞれの本の中身を知らなくても、背表紙のタイトルを見るだけでも、おそらくその方がどのような視点をもっているのかとか、自分

とはどういうところが違うんだろうとか、おそらくこんなような視点なんだろうとか、合っているかどうかはわからないけれども、なんとなく想像はできるんじゃないかなって思いますね。で、また、おそらくその方が僕のこの書棚を見たときに、やっぱりそこに並んでいる本の背表紙のタイトルを見ることによって、ああ、この人はこんな視点も持っているんだとか、こんな本を読んで戦争遺跡のことを研究しているんだとか、きっと何か思うところがあるんじゃないかと思うんですね。さらに言うと、その経験によって、僕の部屋から出た次の瞬間に、このなかのどれかを Amazon で注文するかもしれない。それが大事だと思うんですね。

データベースの枠組みを自由にする

金子：なんていうんですかね。その一人一人の持っている書棚のレイアウトなり、書棚に並ぶ本って、あらかじめ決められないし、決まっているものでもないし。

はたと困るわけですよ。アーカイブ作りましょう。で、例えば、なんちゃらシリーズとか、出版社ごとに ID を振ってとか、そういうふうなやり方が一般的ですし、アーカイブをつくりましょうという話で、データベースをつくりましょうという話で、データベースには出版年を書いて、著者を書いてという、いわゆる図書目録を形成するエントリーを入れなさいと。考古学のなんですかね、遺跡なり、一個一個のものの ID を付けて、それに属性とか、それを埋めていくわけじゃないですか。何々時代と思われる。年代とか、出土の状況がどうのこうのとか。それを自由な

目で見るとということと、データベースの枠組みというか、データベースというのは基本的にはあらかじめセットされているのが大前提なので。そう考えたら、今の枠組みを安藤先生はどういうふうに使って自由な使い方に変えているのかというところが気になり始めたんですけど、なんか工夫されているんですか。

安藤：いや、工夫はしないですよ。うん、工夫はしないですね。例えば、本棚のどこに何を置くかというのは、僕自身が何かを調べるのに、確かこういう本があったなとかっていうことを思い出して、それを奥のほうから引っ張ってきて、ここに置くわけですよ。置くと、視野に常に入っているんで、それが僕自身の思考をある程度縛ることになっていくんですね。一方で、いろいろな機会に本棚に目を向けると、そこにはいろんな本があるので、あっ、こんなことを忘れていたな、なんてところに気が付いたりするんですね。そうすると、また何冊か持ってきて、ここにあるものを奥に持っていくということを繰り返しているうちに、自分の思考の枠組みと本棚の構成というのが、どっちが先でどっちが後かといったことではなくて、相互に関係し合いながら変化していく。その中で自然と構成されていくもの、その一場面というんですかね、が現在のこの本棚の構成ということになるんですね。これが例えば、アーカイブだとすると、非常に動的であって、構造を持っているようだけれども、自分自身の思考の変化や外からの刺激などによって、どんどん変わっていくもの、構造自体が大きく変わっていくものというふうに考えられる。そんなふうに捉えられるのかなと思います。

ますね。

金子：2つ気になることがあります。1つは、あの日の並びに戻したいと思うことがあるのか。例えば5年前だったら、あれはあそこに入れていたのに、なんかのきっかけで取り出してこっちで見て、そのあとどっかいつちゃったんだよなみたいなものがあるのかということが1つと、もう1つは、同じ話かもしれないんですけど、ほかの人が、例えば学生さんが、「いや、安藤先生のあの部屋のここにあったはずなのにない」。そういうことはどういうふうに折り合いを付けているのかな。

安藤：なかなか難しいですね。ある意味では、折り合いはつかなくて。自分自身が過去の構成を復元できるかといったら、そんなことはおそらく不可能で。その記録を取ってれば別ですよ。ここのすべて写真かなんかの記録を取っておき、その都度その都度の状況に戻せるような工夫をしていれば可能かもしれないんですけども。ただ、それをやることの意味というのが、ちょっと僕にはわからないところがありますね。過去の自分自身がやっていたこと、例えば、本棚の構成を過去の状況に戻して自分が見ることによって、何がそこから見えてくるんだろうかということですね。

あ、でも、ごめんなさい。意味がわからないと言ったけど、意味あるわ。それはありますね。あるある。それによって、自分自身が過去にこんなことを考えていたんだとか、こういうようなことに目を向けて研究を組み立てていたんだなということに気が付くことができれば、それが次につながることももちろんあると思います。だから、

過去を復元することは決して意味がないわけではないですね。それも大事ですね。

あと、例えば学生がここから本を見つけ出すことができるかという、それはやっぱり不可能ですよ。こちらは、そういうシチュエーションが生じたときに考えなければいけないことなんだろうとは思いますが、あくまでも今、ここに展開されているこの空間は僕のプライベートなところであって、共有ということを想定はしていないんですよ。こういう場を共有していく場合に果たしてどのようなことが必要になってくるかですよ。おそらく金子先生がお聞きになりたいのもそういうところなんだろうと、どういう整理をすれば共有の場になるのかということなんじゃないかと思うんですが…。どうなんですかね。

僕自身は、本を例に取れば、一冊一冊の本の基本的な情報がどこかに格納されていて、自分自身はその中からこれこれこういうものを取り出して、自分専用のプライベートのアーカイブをつくれますよ。その中で自分の思考は、そのアーカイブとの相互関係の中で組み立てられていきますよ。どんどんどんどん動いていきますよということですね。ほかの人も、それぞれどんどんどんどん動いていく世界をたくさん構築していて、そうしたたくさんある世界をたまにのぞいてみたりすると、なんか自分とは違う、自分が進んできた道から見えていなかった世界がそこにあるな、なんていうことに気が付く。そしてそこで自分自身の進み方、アーカイブと自分の思考との相互関係になんらかの変化が現れていく。そんなようなことができると一番いいのかなという気はしています。

MoSaIC の可能性

金子：いやあ、なんか今のお話を聞いていると、もちろん、僕がやっている研究も先生よくご理解していただいて。まさにそういうところを狙いたいわけなんですけれども、それって人間の、新しい情報を発見していくプロセスにどれだけデジタルというテクノロジーが寄与できるのかという話でもあり、どこまでをこのデジタルのプロセスの中に入れていけないのか。システムとして組み込めないといけないのかということかなとは思っていて、そこが非常に難しいんですね。こう考えて、自分の行動とかを分析しながら、こういうことが必要だよ、これもやんなきゃ、こういうことからきっかけを得ているよねと。それをまるっと全部デジタル化できるのかというと、そこには途方もないエネルギーを注ぎながら、結果として先ほど多分安藤先生がおっしゃったみたいに、毎日見るものではきつなくて、時々ふっとほかの人を見て幸せになるということと、そこまでしてやる価値あるのかななんていうのを今ちょっと思っちゃったんですけど。



安藤：僕が DMC で非常に刺激を受けたというか、自分の考え方に非常に近くて、ものすごく大きな可能性を感じたのは、やっ

ぱり MoSaIC なんですよ。

MoSaIC というのは、ある意味では、あるオブジェクトに対する多様な世界ですよ。オブジェクトが一つであると規定してしまうのはちょっと問題だと思うんですけども。オブジェクトというのは一つじゃないかもしれないので。オブジェクトというかたちで、情報があるアーカイブに入れている時点で、(オブジェクトの内外という境界を設定して) 切り取っちゃっていることになるので、現実のいわゆる物質的世界のものとは存在が違いますが、そうであったとしても、あるオブジェクトをめぐる、いろんな人が構築したいろんな世界が重なり合うというんですかね。あるオブジェクトを軸につながるというふうに言ったらいいんでしょうか。自分自身がそのオブジェクトを見ている世界と、ほかの人が見ている世界がなんとなくつながっていく。自分は自分の世界の中でそのものを見ているんだけど、(別の世界とも) つながっているんで、のぞいてみようかなとか、なんでこんなような世界につながっていくんだろうとか、そんなことを思うわけです。ほかのさまざまな世界、複数の世界へのアクセスが開かれているというんですかね、そこに非常に大きな可能性を感じたんです。

目的的で何かこういうことを知りたいという情報の検索方法は、もちろんとても大事なことなんだろうと思います。一方で、それ以外に、遊びといたらなんですけれども、全然効率的でもないし、目的的でもないんだけど、どこかにつながっていて、そこをたどっていくと、例えば同じ本なんだけれども、その周りに全然違う本が展開している本棚にたどり着くというイメージですかね。そして、そこをのぞいてみ

ると、ああ、なんか自分とは全然違う構成だ。また別のところへ行くと、ああ、また全然違う構成だ。なんでこの本とこの本が同じ棚に並んでいるんだろうとか、何かと想像力をかき立ててくれると。自分自身の本棚の構成を見直して、さっきも言いましたが、Amazon でその本棚にあった本を買って、ここに足しちゃおうかなみたいな発想が生まれてくる。こうしたことがやっぱり、自分自身が研究をやっていくうえで、重要なところなのかなと思っていますね。なので、とても MoSaIC には惹かれて、なんかこういうような（アーカイブ群の）世界に広がっていくといいよねということを考えています。

巨大なアーカイブが持つ危うさ

金子：ありがとうございます。非常にいつもよく理解していただいて助かります。一方で、そういうふうな Attitude というか、これはなんでこうなっているんだろう。こんな世界もある。そこをまた分析的に見るというのは、研究者にとってみればナチュラルな思考だと思うんですけど、けっこうなエネルギーを要することだと思うんですよ。

一方で、冒頭のシャープネスの話で、シャープネスの高いもの、間口は狭いけど、シャープネスの高いものというのは、すごく奥まで突き刺してくるような感じがあって、突き刺されるもんだから、否応でもなく気付かされるというか、何かそういう側面もあるのかなと。そうすると、情報のシステムなり、情報のサービスとして、どちらが優れているというわけではないと思うんですけど、使い方なんでしょうけど、そ

れが社会の中でコンセンサスとして存在するかということ、僕はまだ存在していない。わかりやすいのが是とされるとか、わかりやすい言葉だけれども、そこに具体をイメージできるのかとか。具体をイメージしようとし始めると、極端にそのエネルギーが掛かるというか。エネルギーが掛かる情報システムって、俗な言い方で便利なのかと言われると、便利と言い切れないというか。そのあたり、どういうふうにお考えですか。



安藤：いや、僕自身は、例えば、みんなが使うデジタルアーカイブなんてものは、やっぱり遊びという、ある意味では便利さのないものでいいんじゃないかなと思っているんです。今はなんでも効率が優先され、目的に合った情報を、大量にいつでもできるだけ早く収集することが大事というふうに言われていると思うんですけども、それを追求していくと、どうしても冒頭の話になっていってしまいますけれども、ある秩序に基づいて情報を選択し、それを並べていくという、特定の秩序や構造に強く依存したアーカイブになっていくわけですね。そういう（特定の秩序や構造をもつ）巨大なアーカイブをみんなが同じように使ってしまったら、おそらく僕らの世界の認識というのは広がっていかないんじゃないかなって思います。

もちろん、そこにはたくさん情報があって、個々人がそれぞれアクセスして自分なりの認識を構築するので、言っていることはみんなばらばらになっていくし、それなりに真新しいことをやっているように見える研究が出てくると思うんですけれども。それぞれの背景に情報の在り方を強く縛っている、特定の秩序や構造があるということに気が付かなくなってしまうのではないかというところに、僕自身は、非常に強い危機感を持ってしまうところがあるんです。だから今、いろんな学術的な世界、人文の世界でも、巨大なデジタルアーカイブをつくり、世界中の研究者がそれぞれの場所にしながら利用できる。そういうプロジェクトがどんどん進んでいると思うんですが、大きな情報を持った巨大なデータベース、アーカイブがいかに使いやすいものであったとしても、やっぱりある秩序に基づいて情報を選択し、ある秩序に基づいて整理したものですし、その秩序に則って浮かび上がってくる要求に対して情報が引き出されるというところは絶対に変わらないと思います。すべての人がそこに閉じ込められてしまうことの怖さを僕は心配しているんです。

大きなデジタルアーカイブをつくることで、いろんな世界が広がっていく。もちろん、それで世界が広がっていていることは間違いないんですけども、一方で失っている、見ることができなくなっている側面も急速に巨大化しているんじゃないかということですね。新しく見えてきたものがあまりにも大きいから、その一方で、見失っているものの大きさにも気付にくくなる。これはやっぱり怖いなど。

なんかもっと小さなアーカイブを、それ

ぞれそれこそ本棚のように自由に構成できて、一方でいろんな人のアーカイブも見ることができる。(そうしたほかの人のアーカイブから刺激を受けつつ) 自分の思考と相互的に関係し合いながら変化していくアーカイブですかね。そういった側面もどっかで守っておかないと、デジタルの世界が人間の可能性を狭めてしまう。便利さであるとか、効率性であるとか、そういったものを追求することで、大事なものを犠牲にしちゃう可能性はないのかなというところですね。これが、僕自身が、常に思っているところなんです。

金子：ありがとうございます。本当に楽しいお話ありがとうございました。

安藤：いえいえ。自分自身、こういう話になるんだろうな、と思っていたところとかなりずれてきてしまいました。といっても、あまり用意はしないで臨むつもりではいたんですけども。

金子：いやいや、僕は、まだ聞きたいことはあるんですけど、続きをやり、第二弾でいってもいいかなという気もしています。

今日は貴重なお話、どうもありがとうございました。どういうふうに物事を捉えればいいのかとか、最後のほうは社会のものの見方に対する懸念というか、見やすくなっているが故に見失っているものも大きいとか、非常に僕としては、そうだよな、そういう認識をみんなで持つところから始めないと、本当の意味のデジタルアーカイブはつくれないのかなとか、そんなところを思いました。お時間頂戴してありがとうございました。

安藤：いえいえ、どうもありがとうございました。

金子：また続きをお話させてください。

安藤：はい、ぜひよろしく願いいたします。

安藤 広道 (あんどう ひろみち)

慶應義塾大学文学部教授・DMC 研究センター副所長。専門は、先史考古学、近現代考古学、博物館学。現在、慶應義塾内の先史～現代考古学資料の調査・研究に取り組んでいる。DMCでは、それらの成果を用いて、キャンパスミュージアムプロジェクトに参加している。1987 年慶應義塾大学文学部民族学考古学専攻卒業、1989 年同大学院文学研究科修士課程修了、1992 年同博士課程単位取得退学、2004 年より現職。

金子 晋丈 (かねこ くにたけ)

慶應義塾大学理工学部准教授・DMC 研究センター研究員。専門はアプリケーション指向ネットワーク。特に、デジタルデータの利活用を促すデジタルデータのネットワーク化について研究を行っている。2001 年東京大学卒業。2006 年同大学院情報理工学系研究科博士課程終了、博士（情報理工学）。同大学院新領域創成科学研究科での特任助教を経て、2006 年 9 月より慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ総合研究機構、特別研究助教。2007 年、同機構特別研究講師。2012 年 4 月より現職、デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター研究員を兼任。

※役職は対談当時のものです。